箱　崎　31

— 箱崎遺跡第51次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書
第９５２集

２００７

福岡市教育委員会

箱　崎　31

― 箱崎遺跡第51次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書
第９５２集

遺跡番号　HKZ－51
調査番号　0559

２００７

福岡市教育委員会

１．第３遺構面全景（第３焼土整地層上面）

２．第１・第２遺構面（西から）、中央焼土は第２焼土整地層

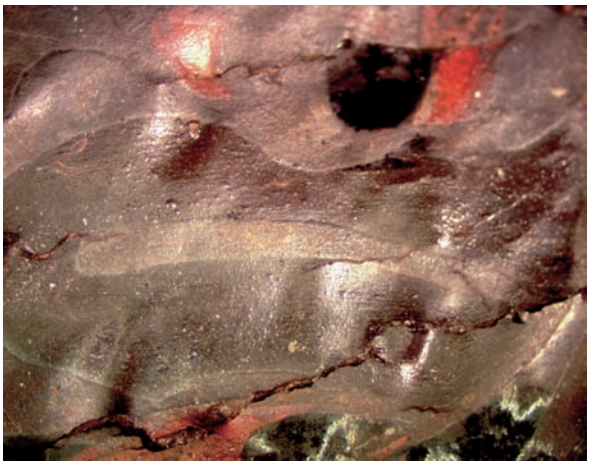
１．土層　aa′の部分（北から）

２．土層　段落ち１（南から）

１．土層cc′（南東から）

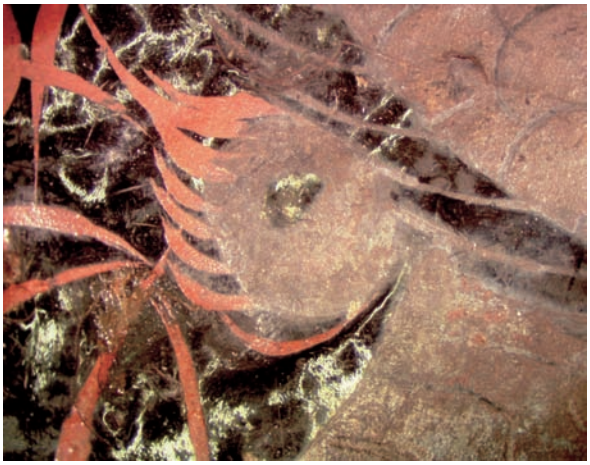
２．焼けた粘土板片（焼土整地層中）

１．SE1007 出土漆器

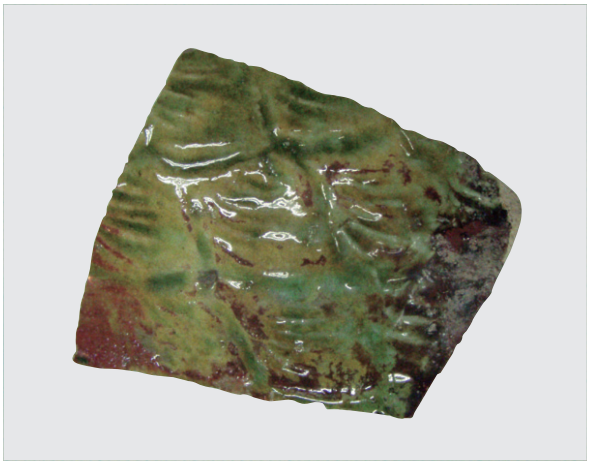


２．鳳凰目拡大

３．鳳凰羽根部分



４．鳳凰珠



５．三彩鳥形水注片

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と歴史が残されています。その中でも福岡平野は大陸との交流の中で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくことは行政に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い記録の保存につとめています。

今回報告する箱崎遺跡発掘調査報告書は共同住宅建設に伴う調査成果についての記録です。この調査では古代末から中世の整地層と集落跡など貴重な遺構を確認することができました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2007年3月30日

福岡市教育委員会
教育長　植木 とみ子

例　　言

□本報告書は東区箱崎1丁目36の共同住宅建設に伴って2006年1月16日から4月11日にかけて発掘調査を行った箱崎遺跡第51次調査の調査報告書である。
□本書に収録した発掘調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。
□遺構実測図の作成と写真撮影は屋山が、遺物実測は平川敬二、山崎龍雄と屋山が行った。
□本書で用いた方位は磁北で真北より6°21″西偏する。
□遺構遺物番号はそれぞれ通し番号とした。
□本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
□貿易陶磁の分類は大宰府条坊跡XV －陶磁器分類編－（2000年）太宰府市教育委員会を参照した。
□箱崎遺跡の立地と環境については『箱崎22』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第852集 2005年）に詳しい

遺跡調査番号	0559	遺跡略号	HKZ-51	分布地図番号	箱崎　34
調査地地番	福岡市東区箱崎1丁目36、37				
開発面積	257㎡	調査面積	270㎡	調査原因	共同住宅建設
調査期間	2006年1月16日～4月11日			調査担当者	屋山　洋

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の組織 …… 1
Ⅱ　調査の記録 …… 1
　1　調査の概要 …… 1
　2　遺構と遺物 …… 1
　　1．整地層 …… 1
　　2．近世墓 …… 3
　　3．井戸 …… 3
　　4．土坑 …… 18
　　5．その他の出土遺物 …… 18
　3　小結 …… 18

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 2
第２図　箱崎遺跡調査区位置図（1/5,000）… 2
第３図　調査区範囲図（1/400）…… 3
第４図　1・2面調査区全体図（1/100）…… 4
第５図　3～5面調査区全体図 …… 折り込み
第６図　第3面焼土整地層下掘Ⅱ柱建物
　　(1/100) …… 5
第７図　SX2274 出土遺物実測図（1/3）…… 5
第８図　整地層土層実測図１（1/30）…… 6
第９図　整地層土層実測図２（1/30）…… 7
第10図　近世墓実測図 …… 8
第11図　井戸実測図１（1/60・1/3）…… 9
第12図　井戸実測図２（1/60・1/3）…… 10
第13図　井戸実測図３（1/60）…… 11
第14図　SE4507・4480・4481 遺物実測図 … 12
第15図　祭祀遺構出土遺物実測図（1/3）…… 12
第16図　祭祀遺構実測図 …… 13
第17図　その他の遺物 …… 14
第18図　石製品実測図（1/3・117は1/2）…… 15
第19図　SE1007 出土木製箸実測図（1/3）…… 15
第20図　SE1007 出土漆器模様略図…… 16

巻頭カラー図版

図版１　1．第3遺構面全景(第3焼土整地層上面)
　　2．第1・第2遺構面 (西から)
図版２　1．土層（北から）
　　2．土層（南から）
図版３　1．土層（南東から）
　　2．焼けた粘土板片（焼土整地層中）
図版４　1．SE1007 出土漆器
　　2．鳳凰目拡大
　　3．鳳凰羽根部分
　　4．鳳凰珠
　　5．三彩鳥形水注片

本　文　図　版

Ph.1　第１・第２面全景（西から）…… 4
Ph.2　第４面全景（南から）…… 4
Ph.3　第５面　Ⅰ区（南東から）…… 折り込み
Ph.4　第５面　Ⅱ－１区（西から）…… 折り込み
Ph.5　第５面　Ⅱ－３区（北から）…… 折り込み
Ph.6　第５面　Ⅱ－２区（西から）…… 折り込み
Ph.7　SX2274 土師皿出土状況（西から）…… 5
Ph.8　SK2041 …… 8
Ph.9　SE1002 …… 9
Ph.10　SE1007 井筒祭祀 …… 9
Ph.11　SE3137（南から）…… 10
Ph.12　SE4369（西から）…… 10
Ph.13　SE4506 井筒（北から）…… 12
Ph.14　SK4281 …… 12
Ph.15　箱崎51次出土銅銭 …… 15
Ph.16　出土墨書土器 …… 17

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経過

2005年7月12日付けで長谷川澄男氏から福岡市教育委員会埋蔵文化財課に福岡市東区箱崎1丁目36番の共同住宅建築に伴う埋蔵文化財事前調査申請書（17－2－351）が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財である箱崎遺跡内に位置しているため、建物解体後の11月8日に重機を使用した試掘調査を行ったところ、現地表面から1.8ｍで砂丘基盤層に達し、その上面で遺構を確認した。その結果をうけ建築に先立ち発掘調査を行い、記録保存を測ることで協議を行った。以上の協議をうけ2006年1月16日から4月11日までの期間で調査を行った。

2　調査の組織

	2005年調査時	2006年整理時
調査主体	教育委員会文化財部埋蔵文化財課第1係	教育委員会文化財部埋蔵文化財1課調査係
	埋蔵文化財課課長　山口譲治	埋蔵文化財1課課長　山口譲治
	埋蔵文化財課第1係長　池崎譲二	調査係長　山崎龍雄
調査庶務	鈴木由喜	調査庶務　鈴木由喜
調査担当	埋蔵文化財課第1係　屋山　洋	整理調査担当　屋山　洋
作 業 員	阿部幸子　岩本三重子　越智信孝　岡部安正　亀井宮子　桒野孝子　指原姶子　堤正子	
	中島道夫　夏秋弘子　塚副義一郎　大橋善平　尾崎裕光　広瀬公則　馬奈木留雄	
	高木章雄　高木美千代　鈴野正夫　中村サツエ　藤野幾志　藤野雅基　寺園恵美子	
	山下嘉人　薗部保寿　井上一雄	
整理作業	大石加代子　熊谷幸江　中村麻衣子　藤野洋子	

Ⅱ　調査の記録

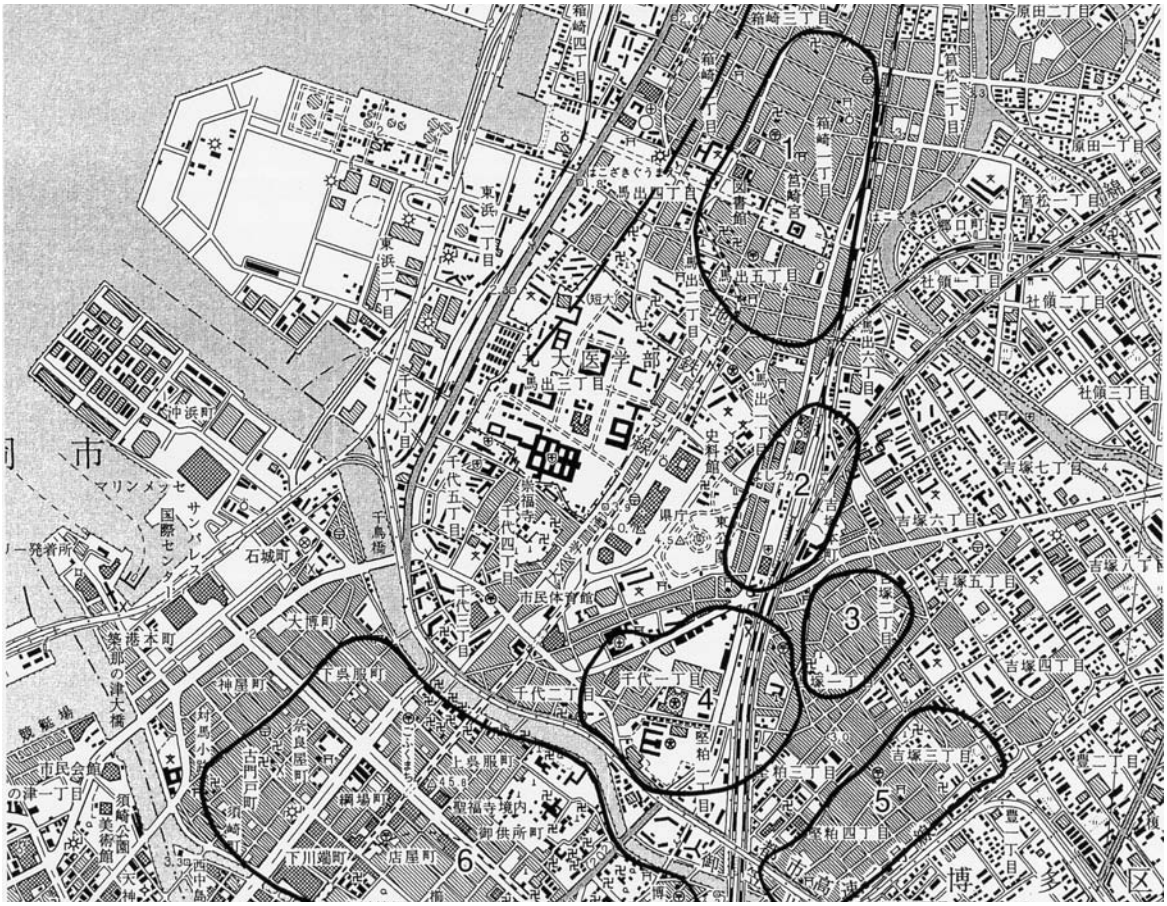
1　調査の概要

事前の試掘調査では現地表面からの深さ160㎝までは近世以降の層であるため、調査開始前に敷地外に搬出することになり、申請者から重機とダンプの提供を受け12月26日に西側から表土剥ぎを開始した。前面道路が狭く小型重機を使用したため表土剥ぎに3週間近くかかることになり一人では全日程に立会う事が困難なため、担当者不在日には事前審査担当者と第1係長が立会うこととした。本調査は試掘を基に地表下160㎝を調査第1面とし、地表下180㎝の砂丘基盤層上面を第2面とする予定であったが、担当者が表土剥ぎ中に地表下100㎝で確認した焼土層が中世の可能性があり、その面からの調査が必要であると判断して表土剥ぎは地表下100㎝までとした。しかし第1係長は当初の地表下160㎝までは近世以降との考えを変えず担当者の代わりに立ち会った日に地表下160㎝まで掘り下げた。その後はすべて担当者が立ち会い、表土剥ぎは地表下100㎝で止めたため調査区西側は地表下160㎝まで掘り下げ2面の調査、東側は地表下100㎝まで掘り下げ4面（1部5面）の調査となった。

2　遺構と遺物

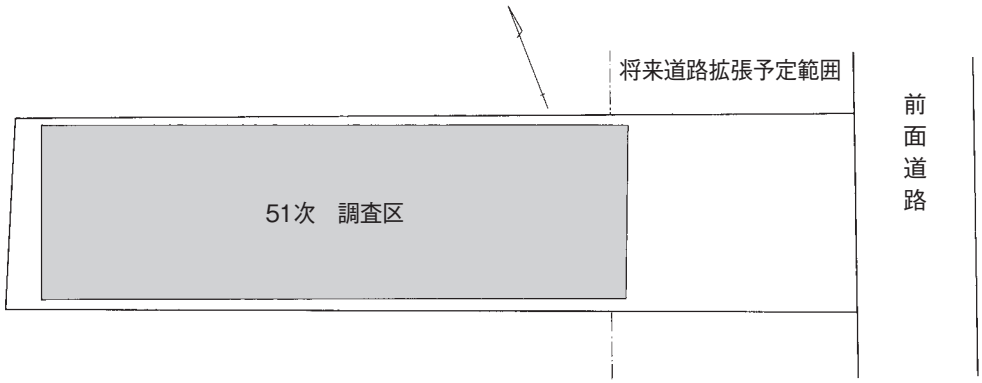
1．整地層

調査区西側は表土剥ぎ時に削平され、東端では井戸に切られてしまっていたが、中央部には整地層が良好に遺存していた。（第8・9図）整地層は暗褐色砂質土を主とするが、他に黄褐色粘質土層や焼土ブロックを多量に含む整地層（以後焼土整地層）、炭化物を多く含む層がある。このうちキー層になると思われる焼土整地層は厚さ3～4㎝の焼けた板状粘土片を含むがこれには木舞孔が開いているため建物の土壁であり火災後の整地と考えられる。この焼土整地層を標高2.5～3.5ｍの間で4面確



第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

第２図　箱崎遺跡調査区位置図（1/5,000）



第３図　調査区範囲図（1/400）

認した。これらの整地層のうち黄褐色粘質土、炭化物層、焼土整地層は黄褐色粘質土の上面に焼けた部分があることから、黄褐色土が整地の化粧土で当時の地表面であり、その上に火災時に焼けた木材が炭化物として堆積。焼土整地層は火災後焼けた建物の土壁を壊して整地した痕跡と考えられる。この整地層は段落ち１や段落ち２、段落ち４により周囲より高くなっているため基壇の可能性が考えられる。東側は井戸に切られ整地層が遺存していないため不明である。第３焼土整地層下では焼土を剥いだ時点で平らな石を確認した（第６図）。基壇のほぼ中央に位置しており、掘方が確認できないため礎石である。全体の遺存が悪いため建物の規模は不明であるが基壇からするとこれ以上大きくなる可能性は小さい。建物の下には土師皿が集中しており（SX2274 第７図 001～015）建物に関連する祭祀と思われる。遺物には墨書土器（010）の他にミニチュアの石製硯（117）がある。段落ち１は第３焼土整地層から下では基壇の端となっているが、第３焼土整地層の上で厚く盛土され基壇は北側へ拡大する。段落ち２はその後の整地で消失し更に南側の段落ち３まで拡大する。段落ち３もその後南側を厚い黄色粘土で盛土しており、更に南側へ拡大している。段落ち４で整地層は溝状の窪みを挟んで西へ続くものの、調査区中央から西では明確な黄褐色粘土層は確認できなかったことから整地は調査区中央の基壇部分を中心とした整地で、基壇は時代が降ると少なくとも南北両側へ拡大している。また第３焼土整地層の下では柱穴の掘り込みがみられるがそれから上層では見られない。また第２焼土整地層上面では礎石基礎と思われる石が集中した掘込みを２基確認したため、基壇規模の拡大とともに最初の掘立柱建物から第３焼土面直下では小型礎石建物（第６図）そして第２焼土面上面では大型礎石建物へと変るなど時期により基壇と建物が変遷していく状況が判明した。現在土器の水洗が進んでおらず時期は不明瞭であるが、調査中の所見では第3焼土整地層は12世紀後半前後と考えている。基盤砂層直上からはヘラ切りの土師皿が数点出土しており、また整地層上層で口禿白磁皿が数点出土していることから、整地は11世紀後半～14世紀に為されたものと考えられる。

２．近世墓

２基の近世墓を確認した。本調査区は戦後まで寺の墓域であった。ただ表土剥ぎの際には近世甕棺は小型棺を１基確認したのみである。調査区北西端では深さ1.3ｍ前後の素堀りの掘込みが集中していたが覆土は暗黄褐色で骨片らしきものが混在していたためほとんどは土壙墓であろう。

SK2041（第10図 016）は須恵器甕で口径52.8㎝を測る。上下とも完全に近く復元できたが胴部で接合できず器高は不明。調整は外面が縦ナデ、内面が横ナデ。胎土は粗く砂を含み、焼成は良好。

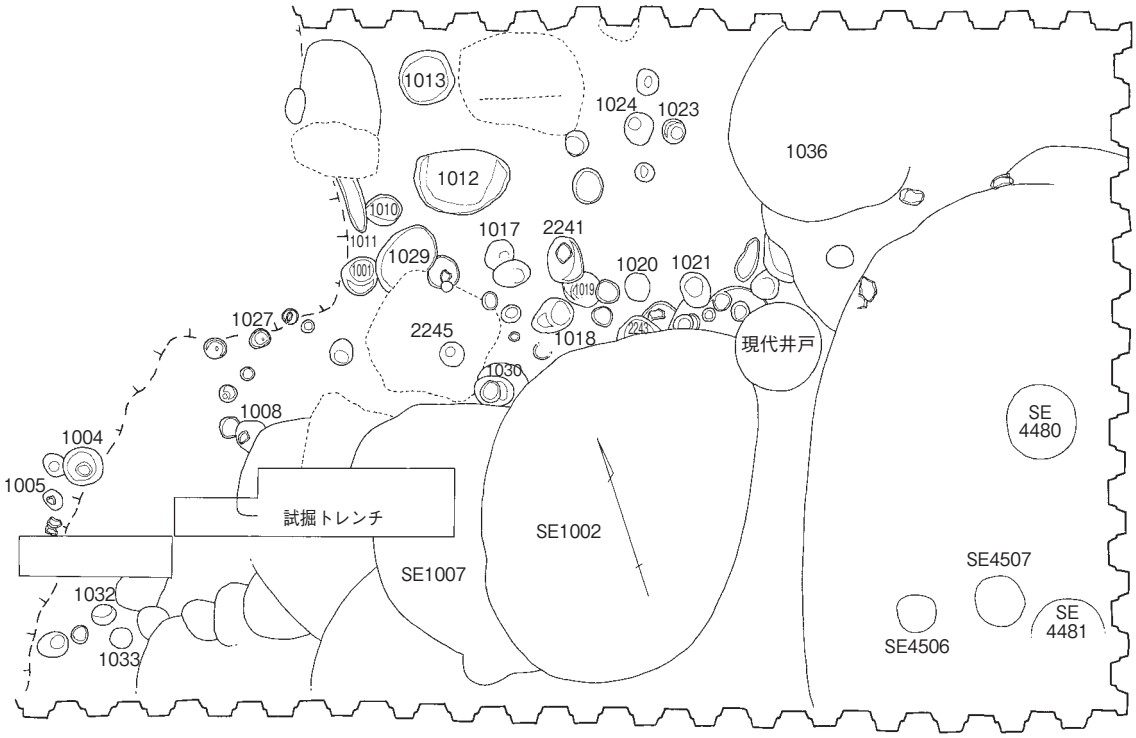
SK2206（第10図 017）は須恵器甕で底径15㎝を測る。外面灰白、内面は茶褐色の釉が垂れている。

３．井　戸

近現代の井戸を除くと９基確認した。１基はほとんど調査区外のため未掘である。

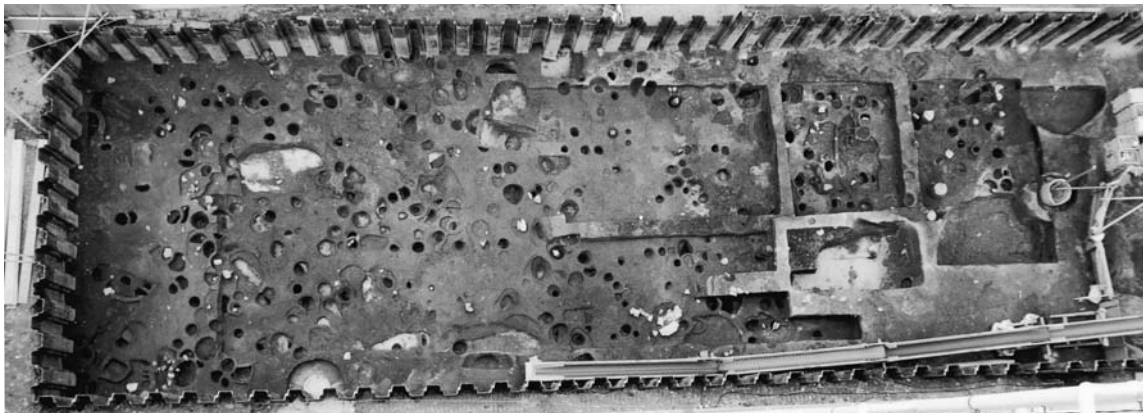
SE1002（第11図 018～022）調査区南西部で検出した。長径4.2ｍ、深さ3.1ｍ、井筒径78㎝、井筒遺存高60㎝を測る。018、019は陶器甕である。020は土師坏、021・022は土師皿である。土器の大半が未洗いで図示した遺物から13世紀後半以降と考えられる。

SE1007（第11図 023～029）。調査区南西部に位置しSE1002に切られる。南北3.6ｍ、深さ3.31ｍ、



第４図　1・2面調査区全体図（1/100）

Ph.1　第１・第２面全景（西から）



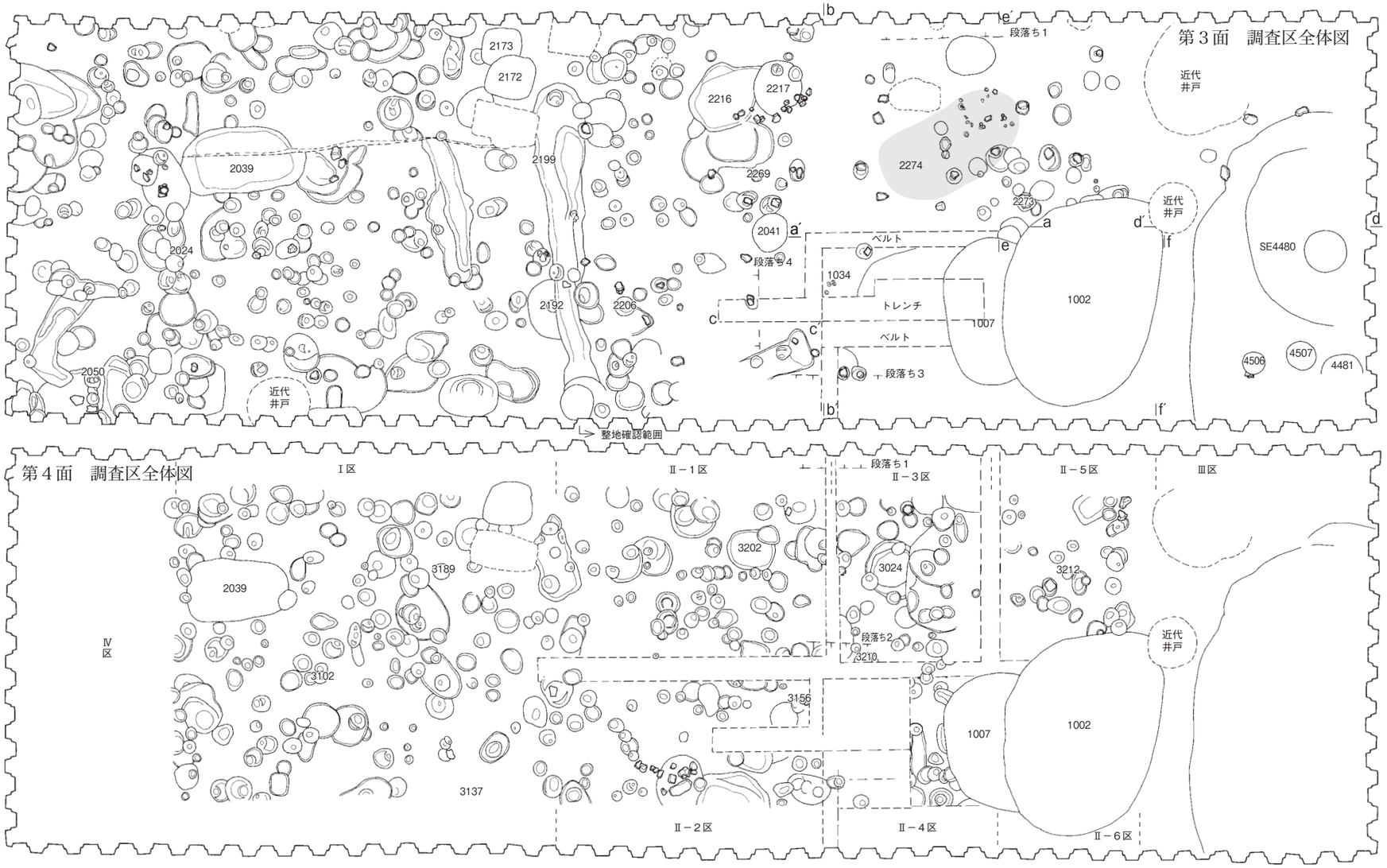
Ph.2　第４面全景（南から）

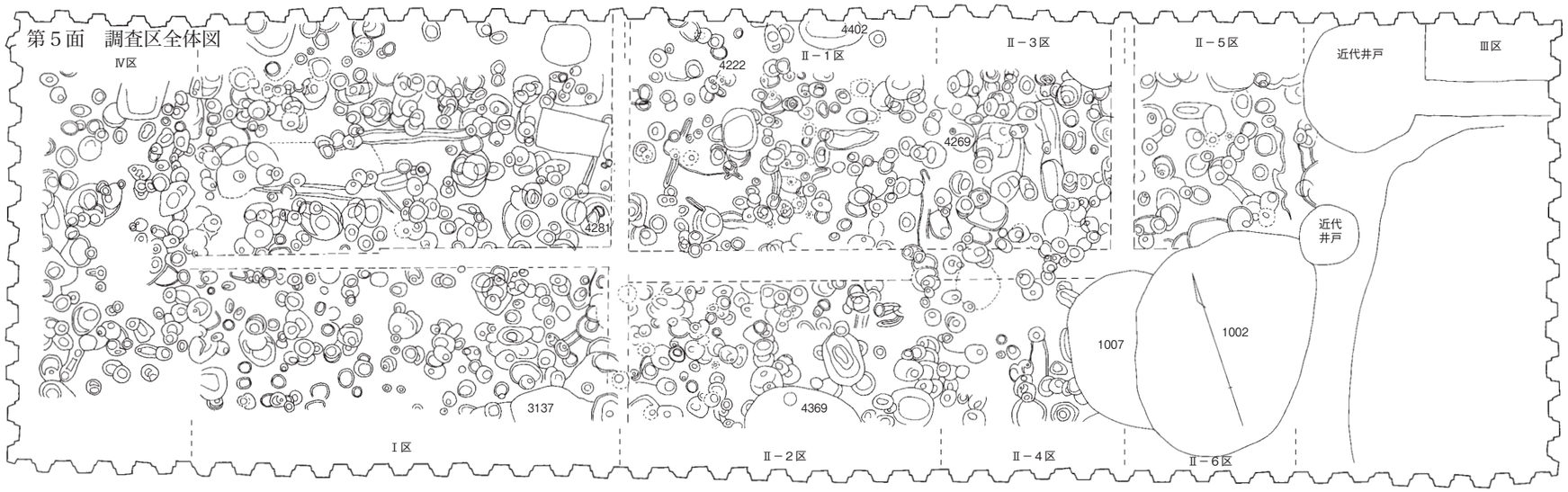
Ph.3　第５面　Ⅰ区（南東から）

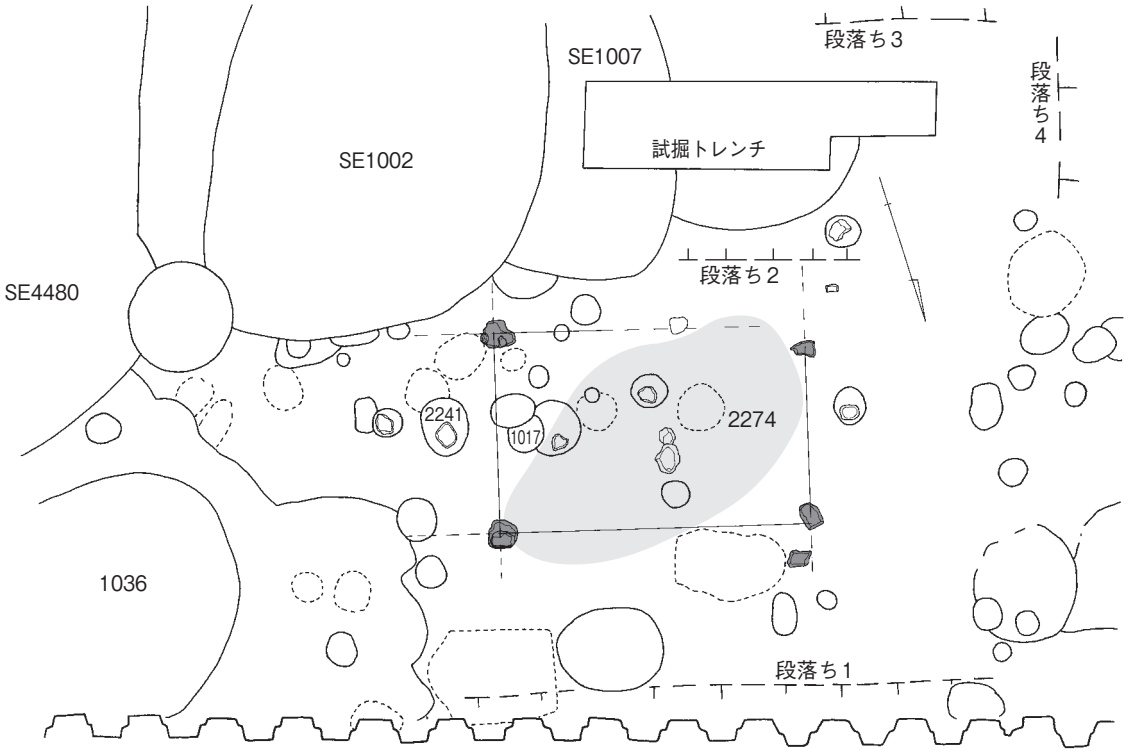
Ph.4　第５面　Ⅱ－１区（西から）

Ph.5　第５面　Ⅱ－３区（北から）

Ph.6　第５面　Ⅱ－２区（西から）

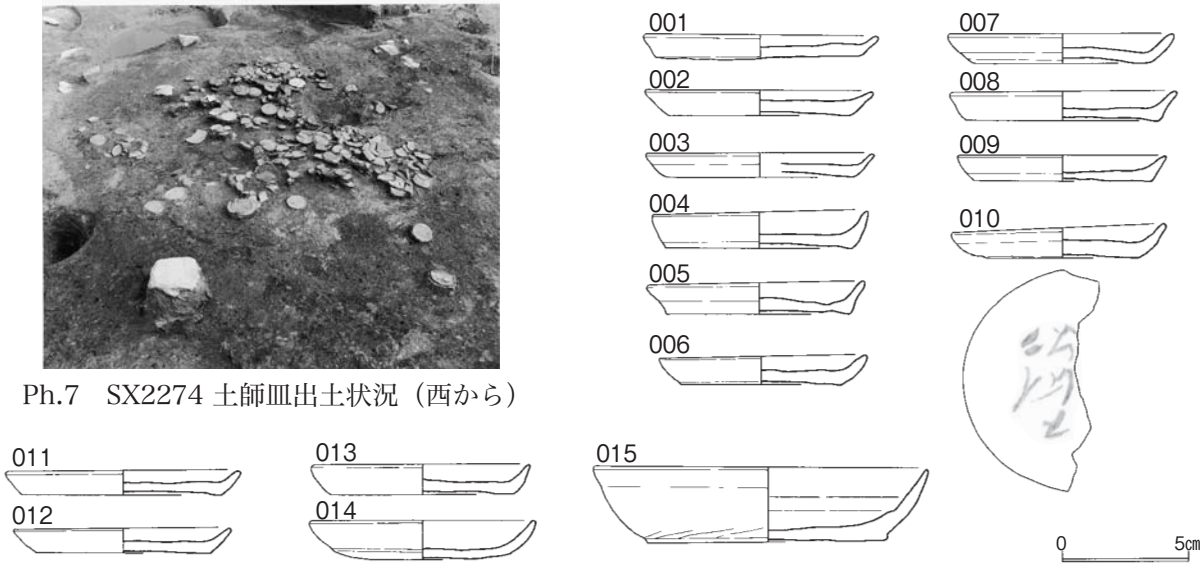






第６図　第３面焼土整地層下掘Ⅱ柱建物（1/100）

Ph.7　SX2274 土師皿出土状況（西から）

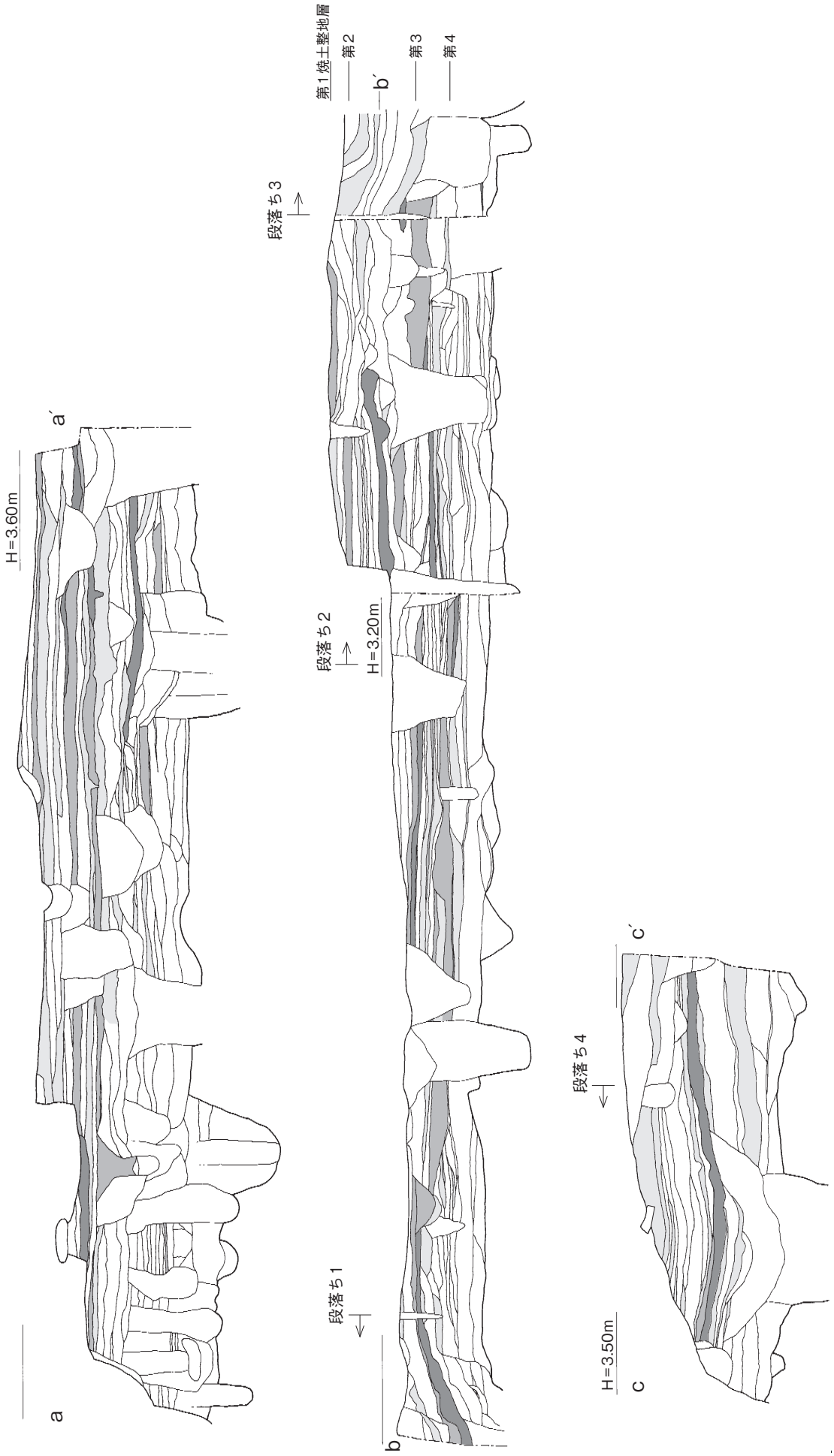


第７図　SX2274 出土遺物実測図（1/3）

井筒径75㎝、井筒遺存高75㎝を測る。２段目の井戸枠が高さ15㎝ほど残るが遺存悪く板材の境は不明瞭である。井戸枠の１段目と２段目の隙間に長さ７㎝幅２㎝の木片を差し込んで隙間を開け、銅銭を３枚差し込んでいる（Ph.10）。井戸の祭祀か。銅銭は２枚が太平通寶で１枚は不明である。井筒最下層から木製の箸が64本（第19図 141・142）と漆器（第20図 巻頭図版４－1）が出土した。

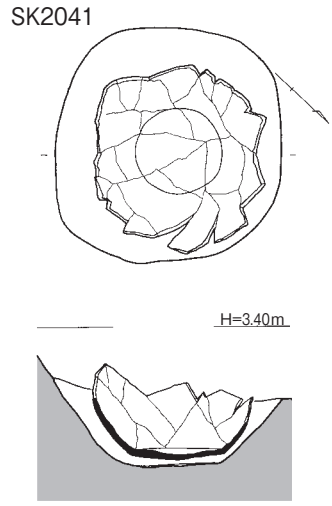
SE3137（第12図）調査区の南辺西側に位置し、第３面で検出した。半分が調査区外に延びる。径3.3ｍ、深さ3ｍを測る。井筒は遺存していない。土器が未洗いで記載できるのは030の須恵質瓦片のみである。他には青磁碗片（同安窯系）、滑石石鍋片、鉄釘、銅銭、陶器大甕片などが出土している。

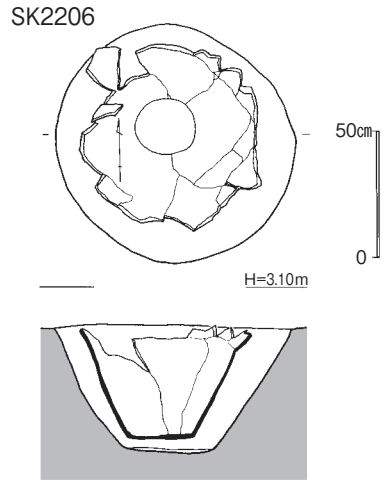
SE4369（第12図 031～043）調査区南辺中央に位置し、第４面で検出した。全体の1/3が調査区外に延びる。掘方径2.8ｍ、深さ2.7ｍ、井筒径58㎝、井筒遺存高64㎝を測る。031～043が出土した。



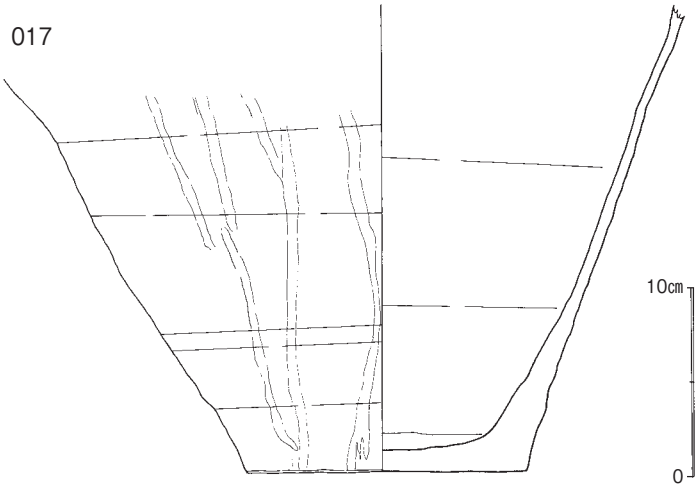
第８図　整地層土層実測図１（1/30）

第９図　整地層土層実測図２（1/30）





Ph.8　SK2041



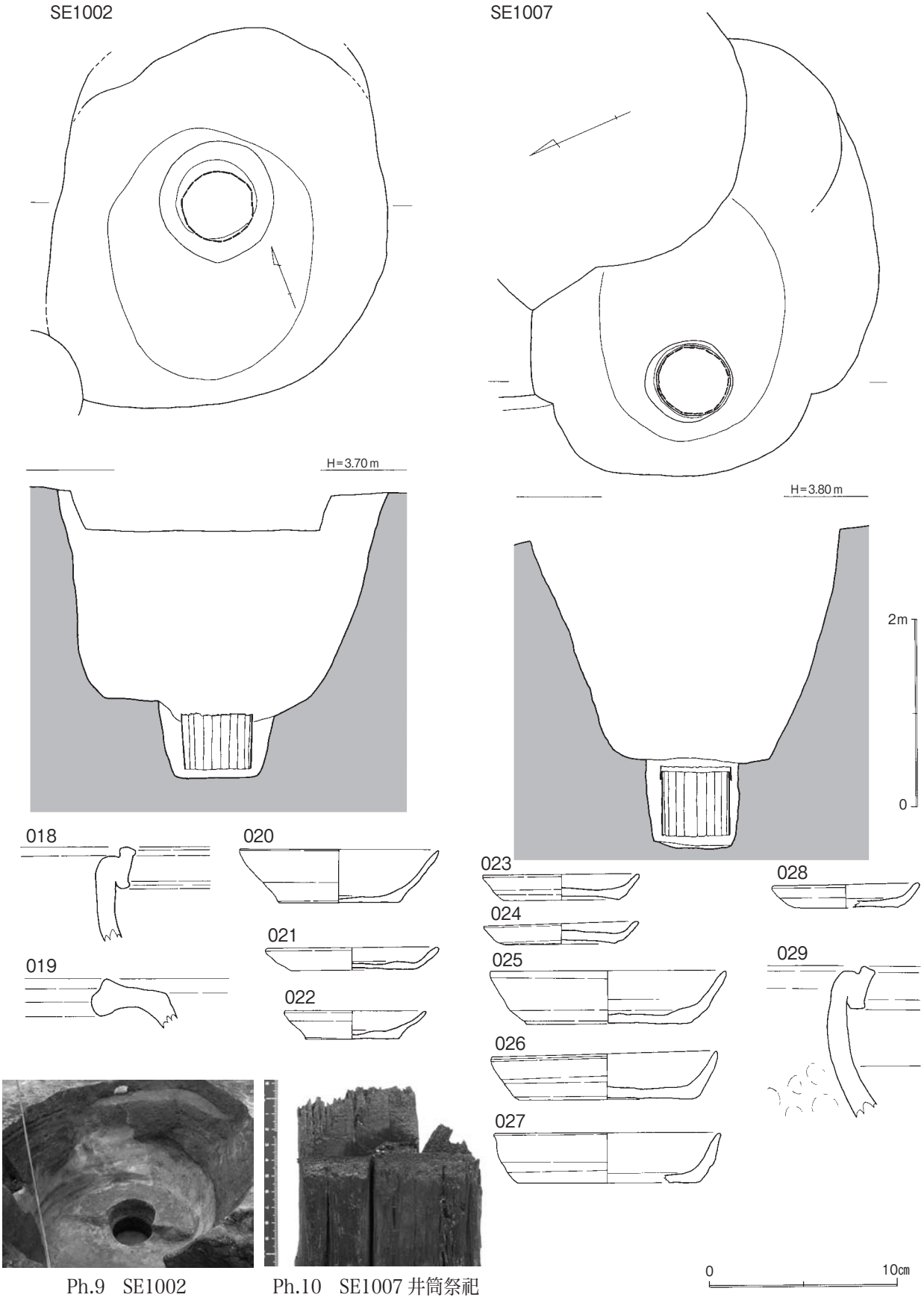
第10図　近世墓実測図（1/30・016は1/8・017は1/4）

031～038は糸切りの土師皿、039は土師器高台付皿、040は土師坏、041は土師質羽釜、042は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、043は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。13世紀中頃と考えられる。

SE4480（第13図）調査区東端で検出した。検出面での掘方径は4.8ｍ、深さ3.1ｍ、井筒径98㎝、井筒遺存高90㎝を測る。幅15㎝前後の板を21枚使用。出土遺物（第14図 050～054）。050は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、051は白磁皿Ⅸ類、052は土鍋、053・054は土師皿。14世紀と考えられる。

SE4481（第13図）SE4480に切られ、SE4507を切る。井筒径96㎝。途中で壁に亀裂が入ったため井筒は完掘していない。出土遺物（第14図 046～049）。井筒内からの出土である。046は陶器水柱Ⅷ類か。047は白磁皿Ⅸ類である。048は土師皿、049は白磁合子である。14世紀と考えられる。

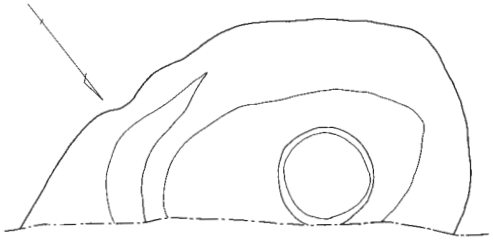
SE4506（第13図）SE4507に切られる。この4基の井戸の中では最も古い井戸である。井筒掘方は



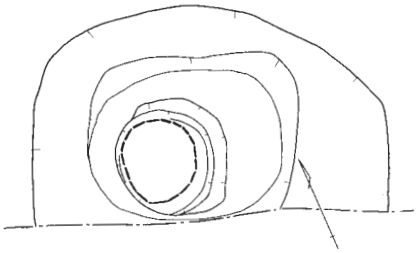
Ph.9　SE1002　　Ph.10　SE1007 井筒祭祀

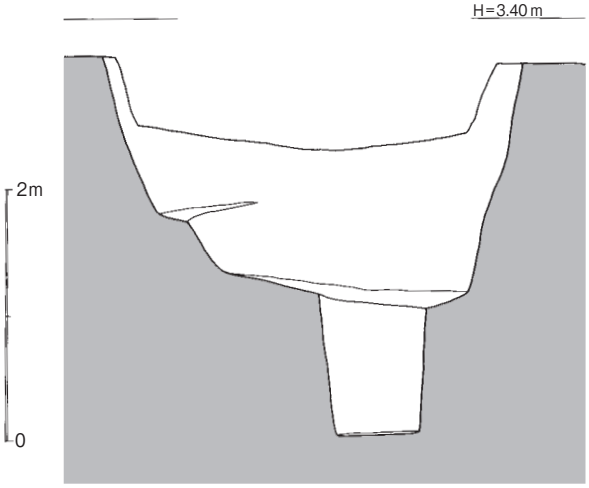
第11図　井戸実測図1（1/60・1/3）

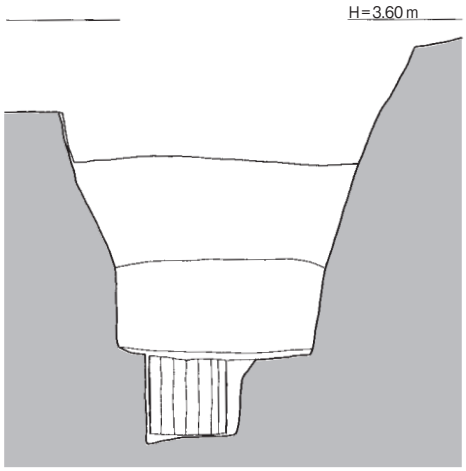
SE3137

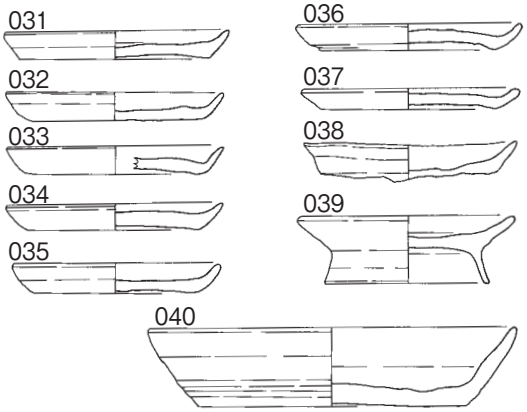


SE4369

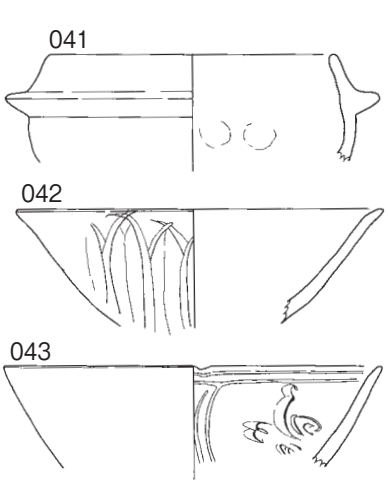






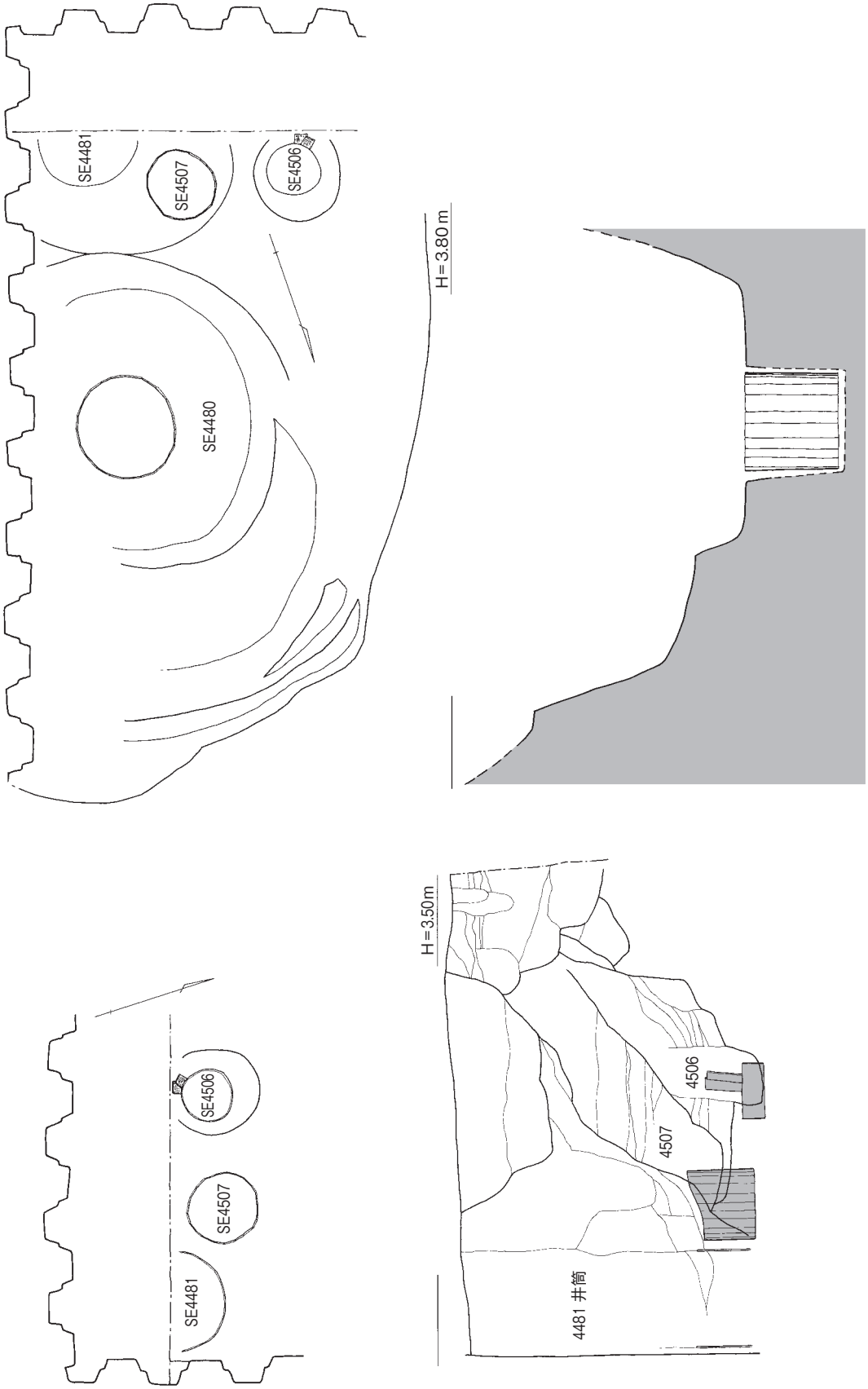


Ph.11　SE3137（南から）

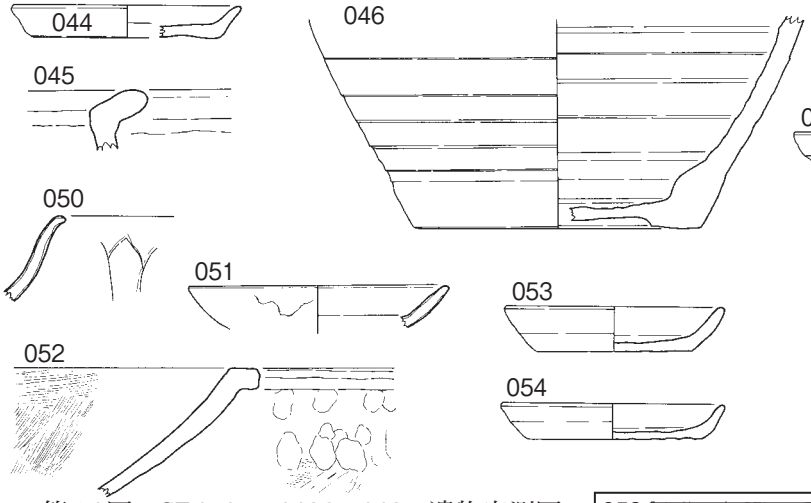


Ph.12　SE4369（西から）

第12図　井戸実測図２（1/60・1/3）

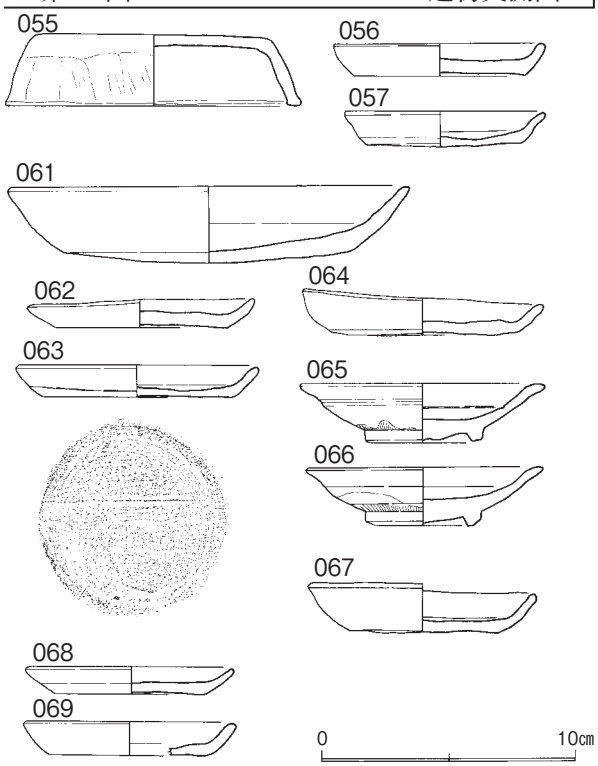


第13図　井戸実測図３（1/60）

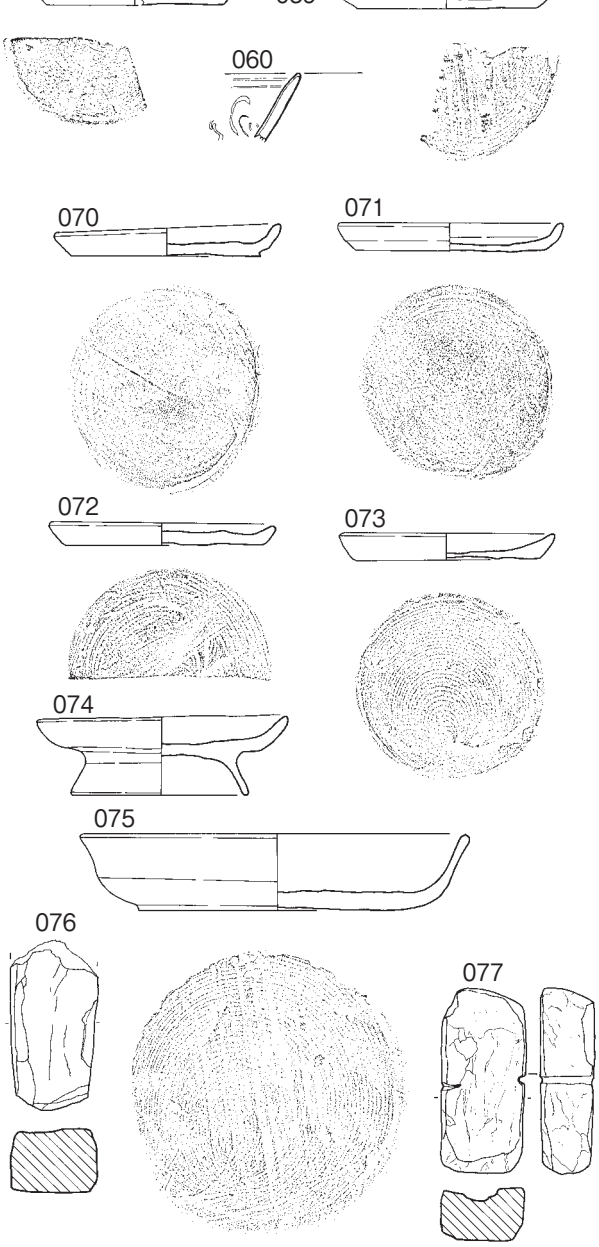


第14図　SE4507・4480・4481 遺物実測図

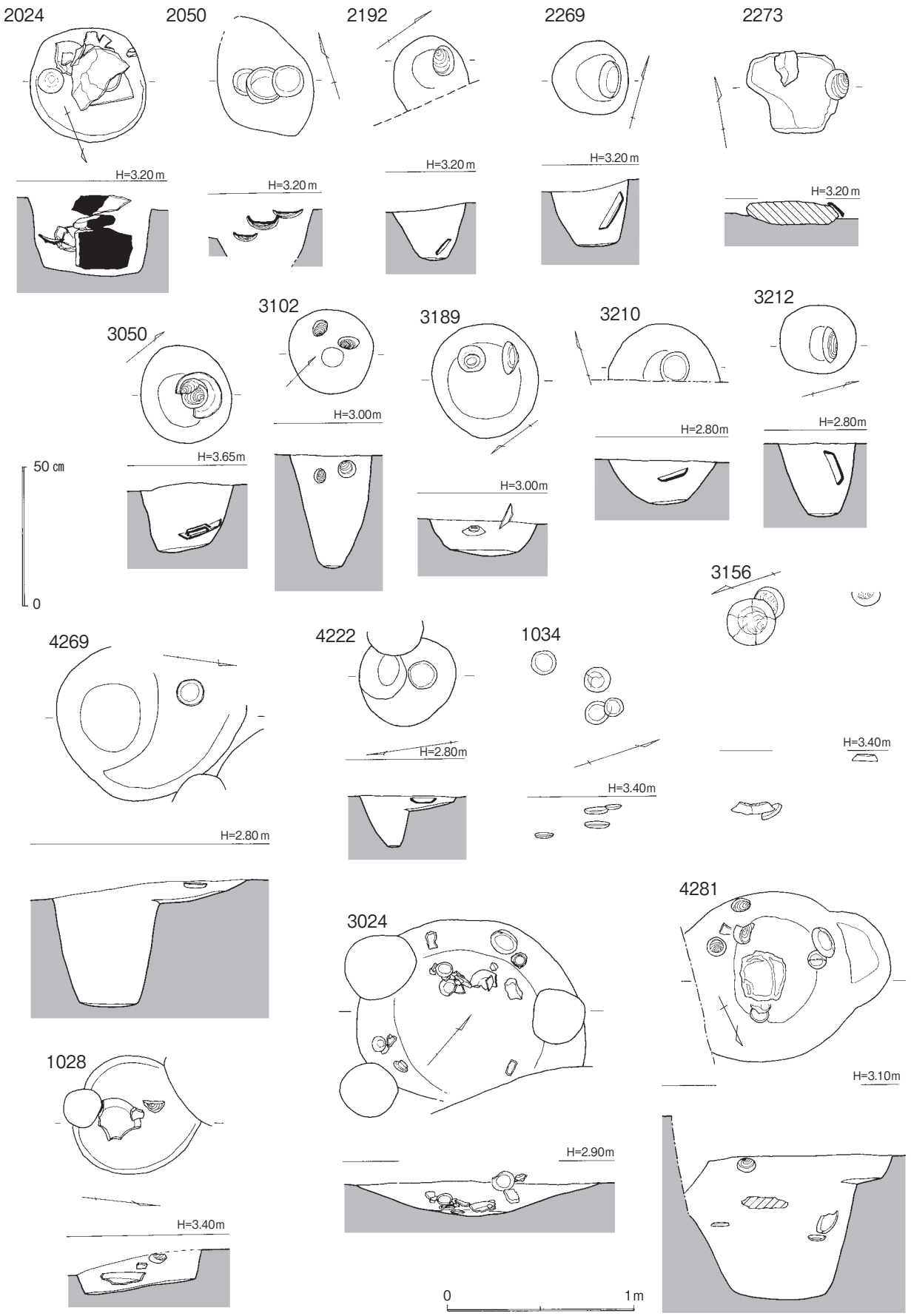
Ph.13　SE4506 井筒（北から）



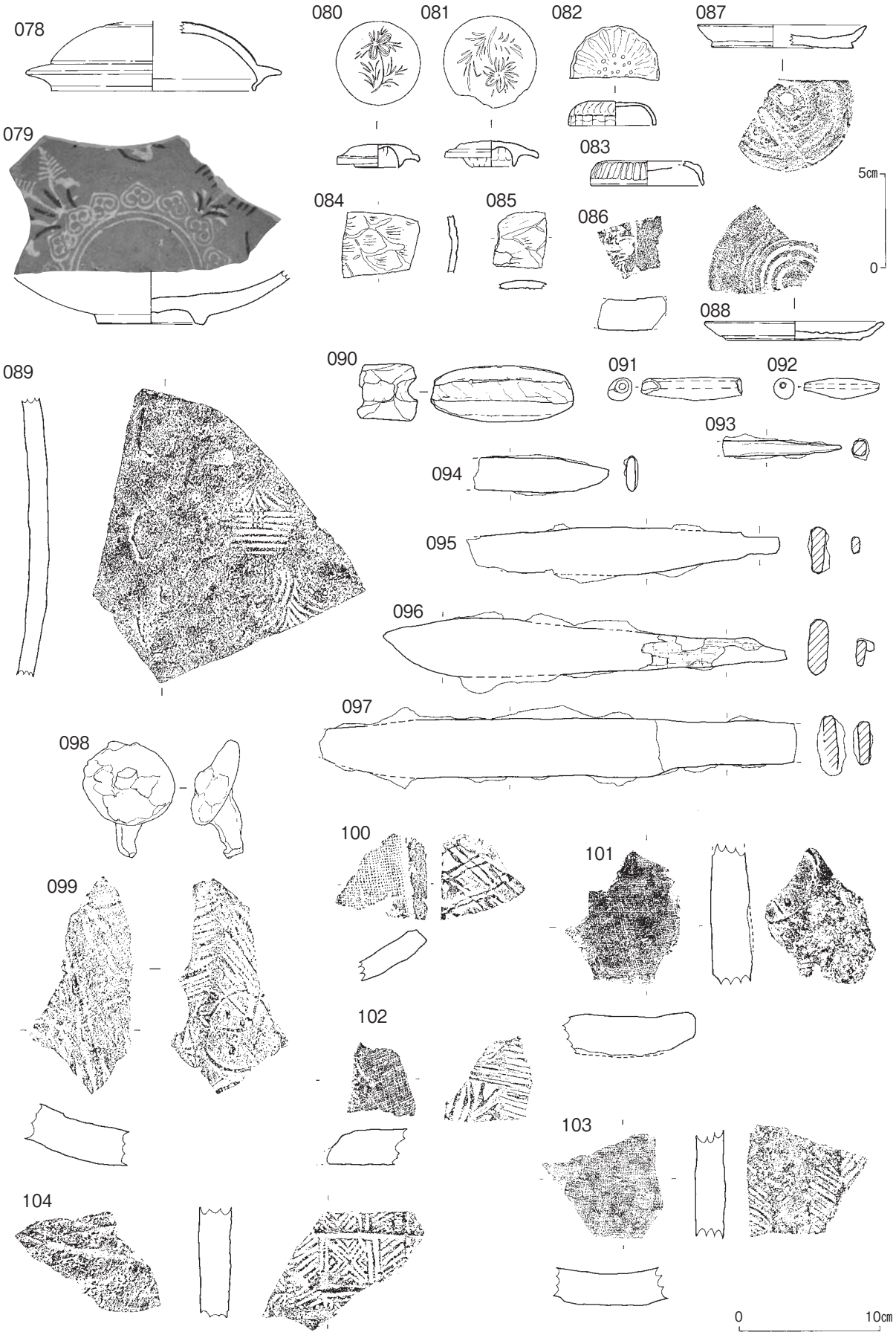
Ph.14　SK4281



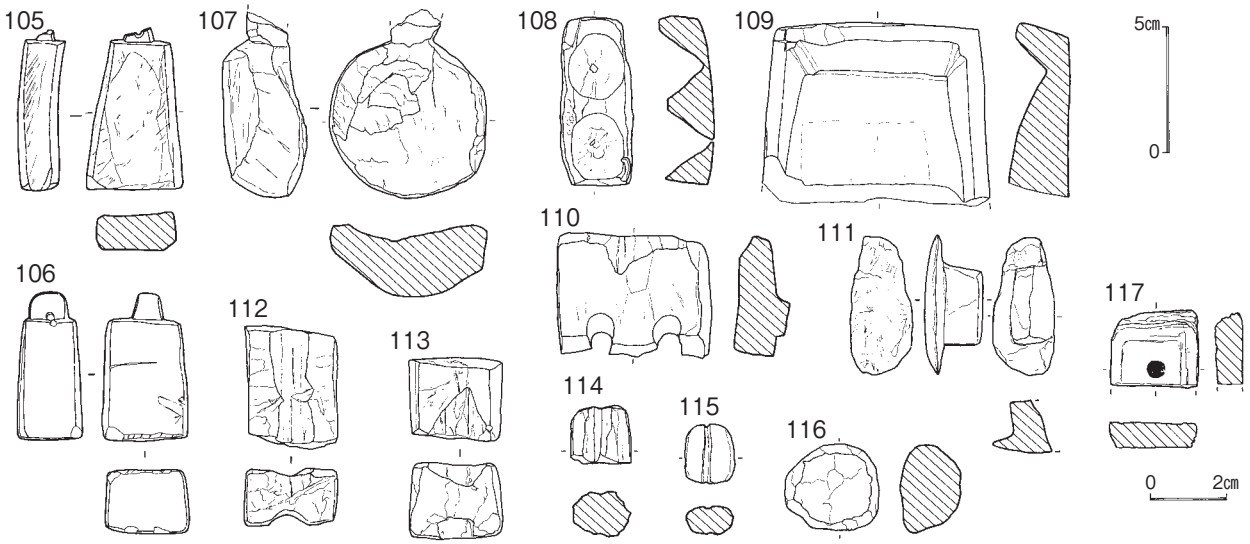
第15図　祭祀遺構出土遺物実測図（1/3）



第16図　祭祀遺構実測図（1/20・3024と4281は1/30）



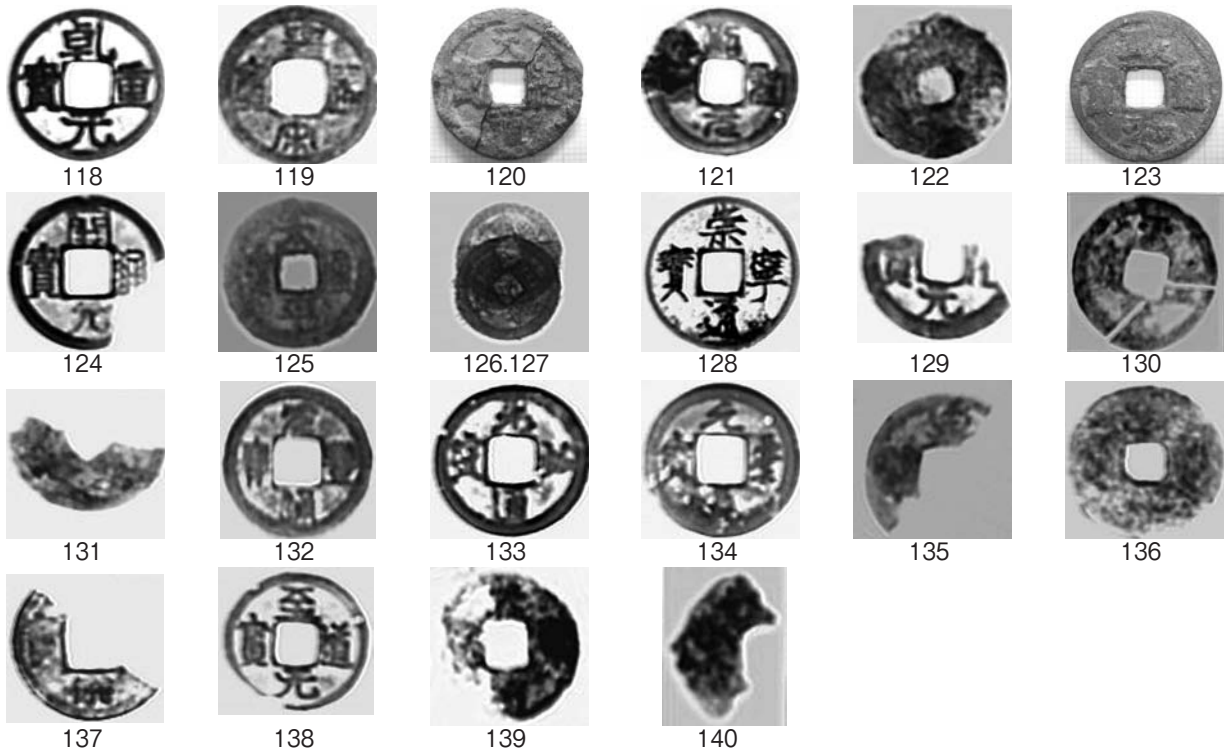
第17図　その他の遺物（1/3・099～103は1/4）



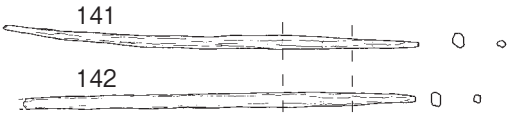
第18図　石製品実測図（1/3・117は1/2）

表1　箱崎51次出土銅銭一覧

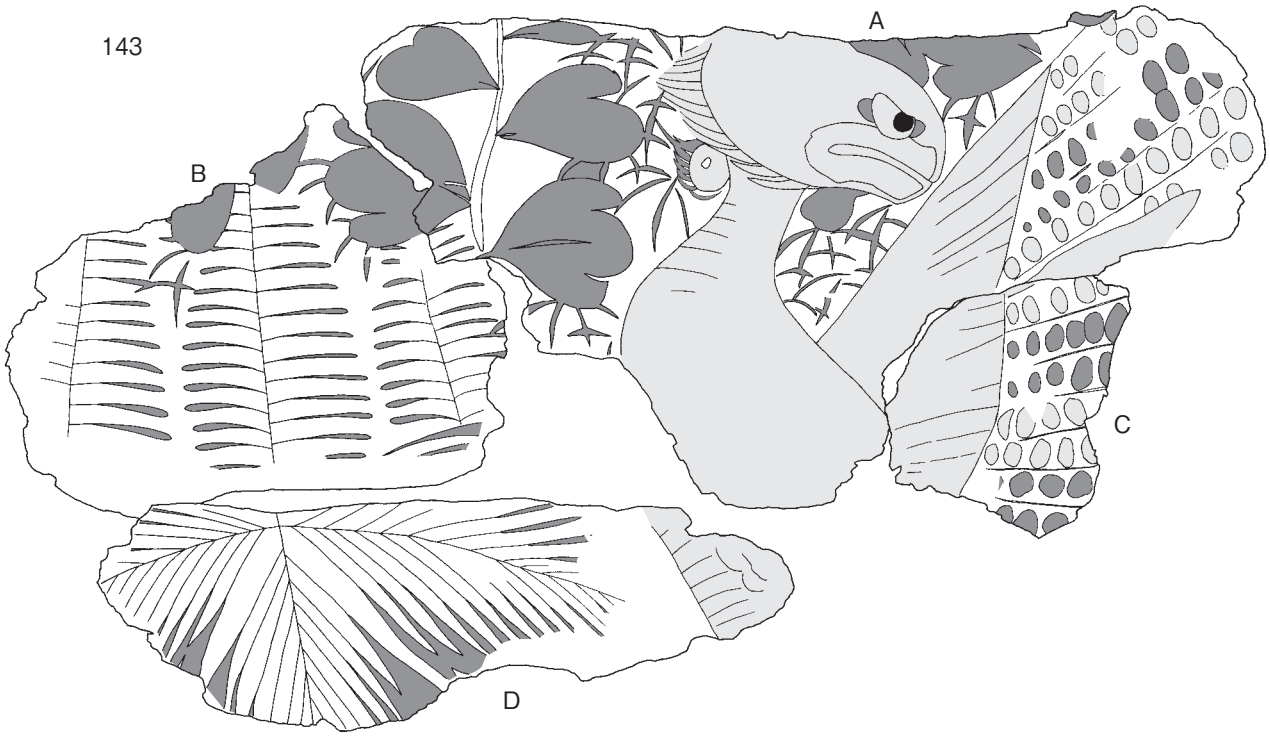
遺物番号	出土遺構	銅銭名	初鋳年		遺物番号	出土遺構	銅銭名	初鋳年	
118	4306	乾元重寶	759年	X線	130	第2焼土面直下	不明		X線
119	2086	皇宋通寶	1039年	X線	131	2～3焼土面間包含層	不明		X線
120	2041	天禧通寶	1017年	写真	132	Ⅱ区第5焼土面～第6焼土面間整地層	元豊通寶	1078年	X線
121	Ⅱ区焼土下土器溜まり西側	紹聖元寶	1094年	X線	133	Ⅱ区3～5面整地層	元祐通寶		X線
122	SE4480	不明		X線	134	3面検出時表採	元豊通寶	1078年	X線
123	SE4480井筒掘方	政和通寶	1111年	写真	135	3面検出時表採	不明		X線
124	SE1007上層	開元通寶	621年	X線	136	表採	不明		X線
125	SE1007井筒祭祀	大平通寶	977年	X線	137	表採	皇宋通寶	1039年	X線
126	SE1007井筒祭祀	大平通寶	977年	X線	138	表採	至道元寶	995年	X線
127	SE1007井筒祭祀	不明		X線	139	表採	不明		X線
128	第3面焼土面直上	崇寧通寶	1102年	X線	140	表採	不明		X線
129	3面直上	淳化元寶	990年	X線					



Ph.15　箱崎51次出土銅銭



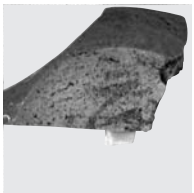
第19図　SE1007 出土木製箸実測図（1/3）



第20図　SE1007 出土漆器模様略図

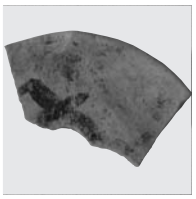
表２　箱崎51次出土墨書土器一覧

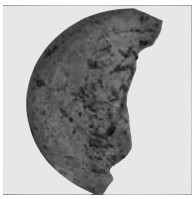
番号	出土遺構	銘文	器種	墨書部位
144	2189	不明	同安窯系青磁皿	外底部
145	2258	不明	龍泉窯系青磁碗Ⅰ類	外底部
146	2274	不明	土師皿	内・外底部
010	2274　R－1	不明（平仮名複数）	土師皿	外底部
147	3024	不明（文字複数）	土師坏	内・外面全体
148	3024	人面か	土師坏	内・外底部
149	4369	不明	白磁碗Ⅴ類	外底部
150	4402	「花　押」カ	龍泉窯系青磁碗Ⅰ－3類	外底部
151	4402	不明（カタカナ？）	白磁皿Ⅲ類	外側面
152	4481井筒	不明	白磁皿Ⅷ類	外底部
153	4506	不明	同安窯系青磁皿Ⅰ－1b類	外底部
154	2～3面間整地層	不明	輸入陶器盤Ⅰ類	外底部
155	Ⅰ区3～4面間整地層	不明	龍泉窯系青磁碗Ⅰ類	外底部
156	Ⅰ区4面～砂面掘り下げ	「一」カ	白磁碗Ⅴ－4類	外底部
157	Ⅰ区南側ベルト	人面カ	土師坏	外底部
158	Ⅰ区南側ベルト	祈■■・・	土師坏	外底部
159	Ⅱ－1・2区間ベルト	不明	白磁皿Ⅳ類	外側面
160	Ⅱ・3～4区間ベルト　3～5焼土面間整地層	不明	土師坏	外底部
161	Ⅱ・3～4区間ベルト　第5焼土面～砂面間整地層	不明	白磁碗Ⅷ類	外底部
162	Ⅱ・3～4区間ベルト　第5焼土面～砂面間整地層	十	白磁皿Ⅵ類か	外底部
163	Ⅱ区3～4面間整地層	不明	白磁碗	外底部
164	Ⅱ区3～5面間整地層	不明	白磁碗Ⅳ類	外底部
165	Ⅱ区4～5面間整地層	綱	白磁皿Ⅲ類	外底部
166	Ⅱ区東端3～4面間整地層	吉久？（他に複数文字）	土師坏	外底部
167	Ⅱ区第5焼土面～第6焼土面間整地層	大	白磁皿Ⅵ類か	外底部
168	2面検出時表採	井	青磁碗	外底部
169	検出時表採	不明	龍泉系青磁碗Ⅰ類	外底部
170	検出時表採	不明	青磁水注	外底部
171	検出時表採	（平仮名複数）	土師皿	外底部
172	第1焼土面から砂層まで（トレンチ）	不明	白磁碗	外底部
117	2274	「●」	硯型石製模造品	

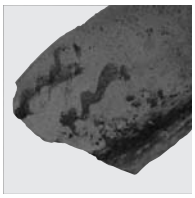

144

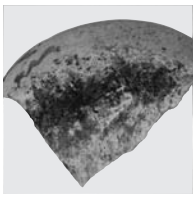
145

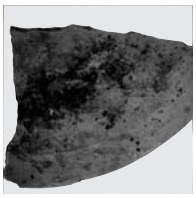
146外底部


146内面

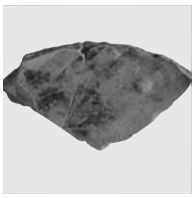

010


147外側面

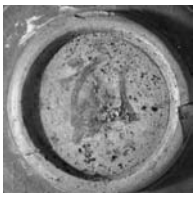

147外底部

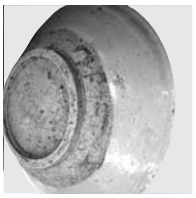

147内面

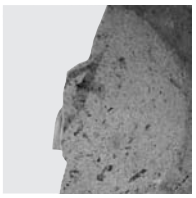
148外底部

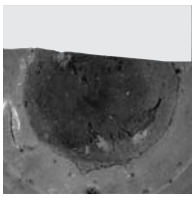

148内面

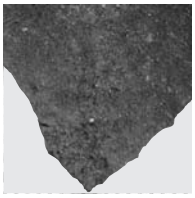
149

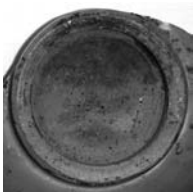

150

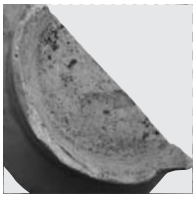

151

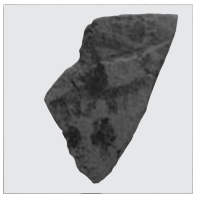

152

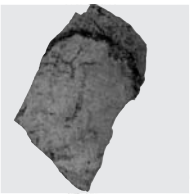

153

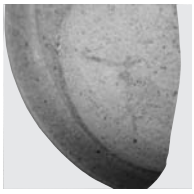

154

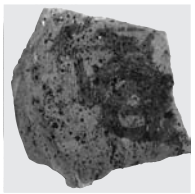

155

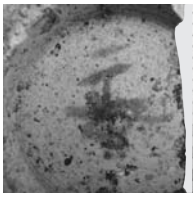

156

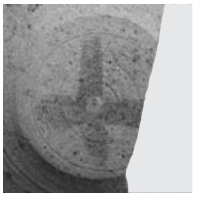

157


158

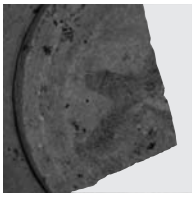

159


160

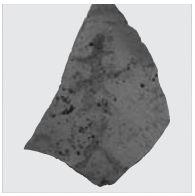

161

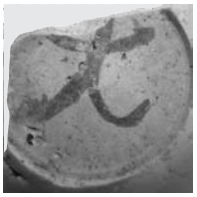

162

163

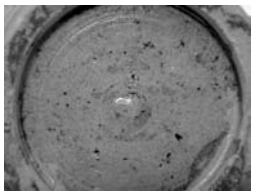

164

165


166

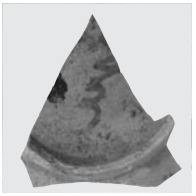

167

168


169

170

171


172

117

Ph.16　出土墨書土器

径82㎝でその中に径50㎝、高さ21㎝の曲物を据える。井筒南側は2段目の板が2枚だけ遺存していた(Ph.13)。井筒内の出土遺物はない。

SE4507（第13図）SE4506を切り、SE4481に切られる。井筒径70㎝弱、井筒遺存高65㎝を測る。幅10㎝程の板を21枚使用している。出土遺物（第14図 044・045）044は土師皿で切り離しは糸切り。045は土師質鍋である。14世紀前後か。

4．土　坑（第16図）

完形の土師坏・皿が1枚～複数枚出土した土坑である。祭祀関連と考え記載した。出土遺物（第15図 055～077)。055～057は2050出土。058～060は2192、061～063は3050、064は3102、065・066は3189、067は4222、068・069は1028、070～077は3024から出土した。1034と3156それに2274（第7図 Ph.7）には掘り込みはみられない。整地時の祭祀と考えられる。

5．その他の出土遺物（第17図 078～103）

078は白磁蓋である。復元口径10.8㎝を測る。079は高麗青磁碗である。080～083は白磁合子蓋、084・085は三彩鳥形水柱の破片である。086は瓦片でスタンプあり。近世瓦の制作者印は多いがこれは中世に遡る可能性がある。87は底部中央に穿孔あり。底部ヘラ切り。088は内底部にヘラで掻き取った渦巻き文がある。この他にも数点の土師皿で確認した。089は渥美焼きの甕、090～092は土錘。093～098は鉄製品で093は鉄鏃根本か。094･095は刀子､096･097は小刀。098は紡錘車か。SE1002井筒内から出土。099～103は瓦、104は磚である。

石製品（第18図 105～117）105～107は権である。108も権か。109は硯で赤色を帯びる砂岩製。110は石鍋再利用品で未製品である。111はスタンプの未製品か。112～115は石錘。115は重さ8.5gの小型品。116は石玉で117は硯型石製品である。真ん中に墨で円を描く。2274(第7図)で出土した。

出土銅銭（表1　Ph.15）現在23枚の出土を確認した。銭名が解るのが15枚である。SE1007出土銅銭は祭祀に使用されているが、銘が判明している2枚は初鋳年が977年と古いものを使用している。

木製品（第19図）141・142は箸である。141は完形で長さ20.5㎝、径6㎜、142は片側端部を欠損しており長さ19.3㎝、径7㎜を測る。他に62点出土したが完形は3点で後は小片である。完形品の長さと径は21㎝で6.3㎜、19.8㎝で6.1㎜、17.2㎝で6.1㎜。中央部は断面長方形で両端を細く尖らせる。他に折り敷きの一部と思われる薄板と縁の可能性がある薄い板状木質が出土。保存処理中である。

漆器は厚さ1～2㎝と厚く表面は緩い弧を描く。内面は粗い削り痕が残る。器ではなく太鼓の胴部などの可能性がある。現在大きく4つの破片に分かれており、AとB以外は接合位置が若干ずれる可能性がある。文様は赤い植物（葉がハート型、垂れ型、短く先が尖った剣型の3種類）の中ににぶい銀色の鳥が1羽立っている図である。鳥は後方に振り返った状態で大きく羽根を広げている。羽根の後方に銀と赤が2列に並んだ飾り羽根が広がる。目の両側が赤く顔の縁には髭状の羽根が生え、嘴は目の後方まで伸びる。頸の横に炎を噴くような丸い珠が描かれている。図柄から鳳凰であるが、顔が非常にデフォルメされてマンガチックであり珍しい。遺存状態は非常に悪い。剥離した細片で鳥と思われる銀色の部分で蛍光X線分析をしたところ水銀朱を検出した。葉の部分でも水銀朱が確認されており最初はどちらも朱色であった可能性が高いが、現在鳳凰の部分だけ銀色なのは鳳凰と葉の部分に水銀朱の技法的な使い分けがあるのではないかとの教唆を得た。

墨書土器（表2　Ph.16）　現在31点を確認した。全体に白磁と土師坏が多く、白磁は博多遺跡同様に「綱」や漢字1文字、花押がある。土師坏は人面や平仮名の複数文字が多く、祭祀に関連か。

動物遺存体　水洗選別などは行っていない。SE1007井筒下層から両端を鋸で切断した鹿角が出土。長さ62.4㎜。その他イルカ類の椎骨や下顎、肋骨、シカの大腿骨が出土。イルカ椎骨は熱で白色化している。油の採取のため湯で煎じたものか。

小結　整理時間がなく、また土器が未洗いのため、報告できたのは出土した遺構と遺物中の一部だけである。本調査地点は周囲の調査地点に比べ遺構や整地層の遺存状態が良く重要であると思われる。特に焼土整地層の時期など確定しないといけない問題も残っており続きを報告する機会を得たい。

報　告　書　抄　録

書　名　　箱崎31
副書名　　箱崎遺跡第51次調査報告
巻　次　　31
シリーズ名　福岡市埋蔵文化財報告書　　シリーズ番号　952集
編集著者　屋山　洋　　編集機関　福岡市教育委員会
発行機関　福岡市教育委員会　　発行年月日　2007年3月30日
郵便番号　810－8621　　住所　福岡市中央区天神1丁目8番1号
電話番号　092－711－4667
所収遺跡名　箱崎遺跡第51次　　所在地　福岡県福岡市東区箱崎1丁目36、37
コード　　市町村　40131　　遺跡番号　022639
北　緯　　33°　37′　3″　　東　経　130°　25′　24″
調査期間　20060116～20060411　　調査面積　270㎡
調査原因　共同住宅の建設　　種別　集落　　主な時代　古代～中世
主な遺構　井戸6基　土坑多数　掘立柱建物1　溝　2　ピット多数　整地層
主な遺物　土師質土器　貿易陶磁　瓦器　黒色土器　滑石製石鍋　滑石製品　木製箸　漆器
　　土錘　石錘　三彩鳥形水柱　瓦　小刀　銅銭
特記事項　整地による基壇とそれに伴う建物と祭祀がまとまって確認でき古代末～中世初頭の箱崎の街の一角を復元できた。また何度か火災に遭っているがその都度基壇が拡張されており、基壇とその建物の性格が注目される。

箱　崎　31

－箱崎遺跡第51次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第952集

2007年3月30日

発　行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神1－8－1
　　ＴＥＬ　092－711－4667

印　刷　株式会社　エージェント
　　福岡市中央区高砂1丁目20－2
　　ＴＥＬ　092－533－6006